新しい生活の始まりに寄せて

田代　和美

十一月の連休中に自宅地区のマラソン大会があった。それまでは見に行ったこともなかったのだが、申込用紙が来て、小学校一年生のKが「出たい！」と言った。マラソンってどんなものだかわかっているのかなあと思いながら、出たがっている一年生たちを連れて、週末に下見がてらコースを走ってみた。野球場の中を走ってから、その周りを二周する一・四キロメートルの道のりを子どもたちは結構楽しんで走り、「出る！出る！」とやる気満々だった。付き合って一緒に走った親たちは久々の運動にへとへとになった。が……ふと私も出てみようかなという思いがモクモクと湧いてきた。踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら……と子どもたちがおもしろがることは何でもやってみたくなるのはいつものことだ。ただ、大人の距離は

三キロ。長年の運動不足が祟って果てしなく遠い道のりに感じたが、「まあ当日キャンセルもできるから」という夫の後押しもあって、勢いで私もKと一緒にエントリーしてしまった。

それから当日まで一ヶ月。早い出勤の日と雨の日以外は子どもたちが登校してから犬の散歩を装って、家の近くを走る日々が始まった。上の娘の時だったら、まだ若くて体力もあっただろうに、何で下の子が運動好きなんだ、と始めのうちは衰えた身体を恨めしく思っていた。練習できない言い訳を色々頭に思い浮かべつつもそれを振り払って走りに行くのは、何だか子ども時代に戻ったような気分でもあった。でも頭が真っ白になる時間を持つことは久しくなかったし、汗を流すと心地よいのは確かだった。三週間くらいすると身体が軽くなり、心も軽くなった気がしてきた。Kや他の子どもたちとも週末に何度か走り、「歩くな！」と子どもたちに叱られながらもそれは楽しい時間だった。

そして迎えた当日。朝から小雨交じりで、中止かなと思いつつ会場に向かうと、予想だにしなかった人の数に圧倒されてしまった。そしてもっと驚いたことに、出場する私たちよりも早い時間から知り合いがたくさん来ていた。入学を期に引っ越していった人たちまで見に来ていて、さながら保育園の同窓会のようだった。今や携帯メールというもので、情報が行き渡ってしまうのだった。小学生一・二年生の部に出場した子どもたちは、大勢の友達や親たちの声援を受けて、手を振りながらニコニコ顔で走った。私は「だらだら走ってるんじゃない！」とハッパをかけて、周りの親たちに怖がられていた。認定証と参加賞をもらって誇らしげにしている子どもたちを見て、応援団で来ていた子どもたちは来年は絶対出場する！　と堅く心に決めていた。子どもたちの部が終わった後、雨がひどくなり、お昼はラーメン屋さんを貸し切り状態にし

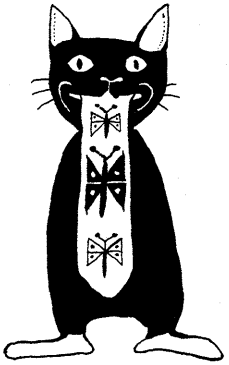
てわいわい過ごした。でも私の出番はこれから。雨よ止むな。みんな、もういいから帰ってくれーという気分だった。上の娘に、「完走できて、まあ二十番くらいになれればいいんじゃない」と言われつつも緊張が高まっていた。各年代毎に何百人という子どもたちの参加者に比べたら二十三人という最も少ない一般女子の部だが、どう見ても周りは錚々たるメンバーに見えた。案の定、本番がスタートした瞬間に後悔した。私が練習したのって何だったの？　というスピードで走るのだった。とにかく前の人に付いていくしかなかった。「がんばれー」という声援をくれるのは大人たち。既に走った子どもたちの声は、自分たちは走ったという自信もあるし、私が怒鳴っていたせいもあって、同じ声援でも「しっかり走れ！」と怒鳴りつけるコーチのような声に聞こえた。距離は違うけど、同じコースを走るという点では対等なのだった。子どもたちに怒鳴りつけられるのは結構快感だった。そしてその声援と怒鳴り声が私から二百パーセント以上の力を引っ張り出してくれた。表彰台には上れなかったが、結果は四位だった。周りも驚いただろうが、一番驚いたのは自分だった。上の娘には、「ママだけ、腰が曲がって今にも死にそうで、まるでゾンビみたいだったよ」とも言われたが。そして私はもらったメダルを子どもたちに見せびらかした。さっきまでは、来年の出場を目指していた子どもたちの目標は、きらりと光るメダルに変わった。

大人たちは、感動したとか涙出ちゃったよとか言っていた。その後手紙をくれた人は「Mちゃんや Kちゃんにあんなに素晴らしい姿を見せてあげられて、少しうらやましくもありました。親の頑張っている姿を見せてあげる事が一番だと常々思っています」と書いてきた。その言葉に、うーんちょっと違うんだけどなあと違和感を感じた。走っているときには子どもたちが見ていることを考えなかったと言ったら嘘になるけれ

ど、でもそれを目的にしてきたわけではなかった。本当はただ子どもたちがやりたいと思っていることを一緒にやってみたかっただけだった。楽しそうなことに引きつけられて「いーれーて」という気分、そう遊びだったのだ。そして楽しくもあり苦しくもあった一ヶ月と当日を通して、少し身も心も軽くなり、自分に自信がついた様にも思う。

私事を長々と書いてしまったが、この間私が実感したことを申し訳ないが勝手に、子どもたちの姿にシフトさせてみたい。私が実感したことは、身体が変わると気持ちの持ち方も変わる。身体的な自信がつくことは自分を肯定的にする、自信がつくということだ。これは根拠のない自信ではない。自分の身体に根拠を持つ確固たる自信なのである。心身一元論を実感したということだろうか。そう考えると子どもたちに備わっている屈託のない存在感や自信は、大きくなる、伸びていく、力が付くというな身体の成長に根ざした自信であるように思われてくる。そして子どもたちが屈託なくいられる、つまり私は私のままでいい、僕は僕のままでいいというような大人から見たら根拠のない自信を持っているということも、多分に身体に根ざしているように思われてくるのである。

保育の場では、遊びを通して子どもたちの育ちを支えていくことを目指している。でも遊べない、遊ぶ気になれない子どもたちもいる。「～しちゃいけない」「～しなくちゃいけない」という枠にはまらなければと自分で自分をがんじがらめにしてしまっている子ど



もの姿がある。がんじがらめになった身体では遊ぶことはできない。歓声をあげて遊んでいる子どもたちの楽しそうな雰囲気に誘われて中に入っていくのに、入るや否や「やっちゃいけないんだよー」という言葉を発してその場の雰囲気を壊してしまう。そしてそんな自分を良しとしてはいないことも感じている子どもの姿がある。片付けとお弁当とお帰りを待ちわびて遊ぶ気にはなれない子どもの姿もある。大人から見れば些細なことで、自分の存在を全て否定されてしまったかのようにつぶれてしまい、世の中の不幸を全部ひとりで背負ったような表情をして、一日中立ち直れない姿もある。そういう子どもたちを見ていると、そういう自分が好きじゃないんだろうな、好きになりたいよねと思ってしまう。

屈託なくいられない子どもの保育の難しさは、頭で一生懸命考えても埒があかないところにある。原因追及をして、それが分かったとしてもそのことに関してはどうにもできないこともあるし、原因をピンポイントで突っつけばなおさら悪循環に陥ることもある。診断―治療ベースならば、何か問題がある。気になる部分にピンポイントでアプローチするのだろうけど、保育に携わっている大人は、小さいながらに色々あるんだろうけど、でも何とかして、楽しいと心から思える経験をさせてあげたいと思うのではないだろうか。それは、楽しい経験が子どもたちの育ちの原動力になることを実感として感じているからではないかと思う。そしてまた、大人自身も子どもたちと一緒に遊んで、あー楽しかったと思えたときに、肩がこっていたことや頭が痛かったことやあれこれ思い悩んでいたことを忘れて没頭していた自分がいたことに気づく経験、自分の身体の中から力が湧いて出てくることに気付く経験を持っているからなのではないだろうか。子ども好きな大人というのは、そういう味を占めてしまった大人なのだろうと思う。

楽しい状況には、今がどんどん繋がっていくような時間の流れがある。あー楽しかったと思える状況には、自己否定の入る余地はない。祖父と一緒にテニスに行って大人たちにテニスの相手をしてもらっていた時に、Kが自宅に電話をかけてきた。「楽しいですか？」と聞くと、返ってきた返事は「声で分からなーい？」だった。楽しさは声に、身体中に表れる。そして楽しさには磁力がある。わーわー楽しそうに遊んでいると、いつの間にか引きつけられて子どもたちは集まってくる。育つ中で生じてくる様々な不安や自分ではどうにもできない事情を抱え続けながらも、楽しかったという経験を積む中で、楽しさを核にして、子どもは人間としてまとまっていく。楽しかった経験の結果として変わっていく身体と心がある。

心地よくある自分、ぎくしゃくしていなくてまとまっている自分を感じられたらいいね。自分を好きになれる自分になれたらいいね。それが他の人と一緒に暮らしていくための基本になることだと思うから。そういう自分を感じられる機会が保育の場の中にたくさんあるといいなと思う。大人として存在していなかったら、子どもたちの中にいる意味はないのだけれど、「大人」として構えてしまったら、子どもたちと一緒に「楽しかったねー」と言える時間を失ってしまう。考えもなく構えもないのは無責任な存在なのだろうけど、「大人」として考える時間を持ちながらも構えをはずせることは、保育者の専門性なのではないかと思う。♪「気楽にいーこうー、ノーテンキーにいーこうー」とKは自作の歌を歌う。ちょっと楽しめそうにないなという気分の時、私もこの歌を口ずさむ。

四月。子どもたちとの新しい生活が始まる。あー今日は楽しかったと子どもも保育者も思える日々がこれからたくさん紡ぎ出されていきますように。

（お茶の水女子大学）